



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.91

日本ルイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション＝WJF）2016年10月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

東日本大震災から5年——被災ジュニアジャズとの共演が実現！

「復興LIVE」 デキシーセインツ&ヤングバンドが熱演

第26回定禅寺ストリートジャズフェスティバル in 仙台とタイアップ

東日本大震災から5年——今年の第26回定禅寺ストリートジャズフェスティバルin仙台(9月10～11日)では、WJFが提案、協賛して同フェスティバルとタイアップ、音楽の力から生まれた「復興LIVE」が実現した。ステージでは地元デキシーバンドの「ジャンピングクロウ」を皮切りに、WJFとは切っても切れない絆の宇都宮「うつのみやジュニアジャズオーケストラ」と石巻ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・リバティ・パイレーツ」が熱演、外山喜雄とデキシーセインツ、多賀城「ブライトキッズ」OB、仙台スウィング・クラブのジャズダンスなど次々と登場して、実り多いイベントが熱狂の渦に包み込まれた。

(小泉良夫)



「うつのみやジュニアジャズオーケストラ」(写真上)と、セインツと共演する石巻「スウィング・リバティ・パイレーツ」

主催: 国分町街づくりプロジェクト 制作: みやぎ音楽支援ネットワーク
協賛: NPO法人イエローエンジェル、日本ルイ・アームストロング協会



気仙沼「スウィング・ドルフィンズ」(写真上)と多賀城「ブライト・キッズ」=ジュニアジャズミーティングin宮城で

大震災から5年、鎮魂のAサウンドで開幕 宇都宮のジュニアジャズも大人気

まずは、11日午前11時から午後4時まで東京エレクトロホール宮城(仙台市青葉区国分町)大ホールで、昨年に続き「ジュニアジャズミーティングinみやぎ」が開催された。気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」の鎮魂のAサウンドを皮切りに、多賀城の「ブライト・キッズ」、うつのみやジュニアオーケストラ、石巻ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・リバティ・パイレーツ」が元気にジャズを奏でた。

【演奏曲目】▽気仙沼=ムーンリバー、ベージン・ストリート・ブルース、ベサメ・ムーチョなど▽多賀城=セサミストリート、アイ・ガット・リズム、テキーラなど▽宇都宮=聖者の行進、ブラジル、ピンク・パンサー、セント・トーマス、スペイン、サテンドール、キャラバンなど▽石巻=バードランド、サマータイム、スイート・メモリーズ、シング・シング・シングなど。

あの子どもこの子も、みんな大きくなって… 外山夫妻感嘆！大成長の宇都宮ジュニア

この会場では、かつて石巻でニューオリンズ・ティピティーンズ財団からのバリトンサクソを贈られたリコちゃんとも再会、こちらの成長ぶりにも、外山夫妻は驚きの目を見張った。東



北大震災(2011年)当時、まだ小学校4年生だった彼女、背丈ほどの楽器を手にして、恵子さんから「大丈夫? 持てる?」と心配そうに声をかけられたほど(写真下の①)。いまは中学2年生(同②)で背丈も外山さんを追い越しそう(同③)。バンドのMCまでハキハキとこなして拍手を浴びていた。

そう、スウィング・ドルフィンズの最年少ランペッターだった天音(あまね)さんは、バンド在籍すでに8年、いまは高校2年生(同④)で、もう今年がバンド最後の年とか。ほんど“光陰矢の如し”ですね。

外山夫妻をさらに驚かせたのが、吉原郷之典さん(うつのみやジャズの街会長、スウィングハード・オーケストラ=ldr, tb)の指揮する、うつのみやジュニアジャズオーケストラ。天才的中学生ドラマーも登場、楽しいステージで聴衆を感心させた。ご機嫌に体を揺るがせ指揮する吉原さんに「彼の指導が素晴らしいのでしょうね」と外山さん。

セインツと熱演！ブライト・キッズOBの千葉君 佐々木さんがWJFの支援紹介ブースも設営

特に今回の注目的は11日、東日本大震災から5年目の「復興(支援)LIVE」。WJFが協賛し、みやぎ音楽支援ネットワークの佐々木孝夫さんらのご尽力で実現した。午後6時から8時半まで元鍛冶丁公園(仙台市青葉区国分町)ステージに地元デキシーバンド「ジャンピングクロウ」(写真下)を皮切りに「うつのみやジュニアジャズオーケストラ」、石巻ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・リバティ・パイレーツ」の2バンドが登場、ステージを入れ替わる際には、仲良しという両バン



「復興LIVE」で宇都宮(左)と石巻のMC(中央)がエールの交換。吉原さん(右)が温かく見守る

ドと一緒にあって「ビギン・ザ・ビギン」を熱演した。なんと両バンド偶然、似たようなベストのユニフォーム、宇都宮が青、多賀城が赤だった。

締めくくりは外山喜雄&デキシーセインツ。さらに多賀城「ブライト・キッズ」OBのトランペッター、千葉隆巻さん(東北学院高3)と櫻井龍太さん(同高2=as)を加えて(写真下)のセインツとのセッション「この素晴らしき世界」「イパネマの娘」などの熱演が繰り広げられた。

セインツは、子供達と一緒に合唱するゴスペル曲「エーメン」に始まり、「セカンドライン」で50人超のジュニアバンドを従えて場内をパレードし会場を燃え上がらせた。「ハロー・ドーリー!」、「リパブリック賛歌」、「セント・ジェームス病院」など演奏(写真下中央)、アンコールでは「ビビディ・バビディ・ブー」を報道カメラマンまで巻き込んで熱唱した。

このステージの司会は尾形奈美さん(写真下①)。2012年10月、ニューオリンズからヤングバンドが東北を訪れ、現地で日米交流を果たした際の通訳。仙台でスウィング・ダンス教室を主宰している方だけあって外山夫妻の活動を詳細に紹介する一方、自らもダイ

ナミックなジャズダンスをペアで披露(同②)、サークルの皆さんも加わってステージを大いに盛り上げてくれた(同③)。

会場入り口には、佐々木さん作成のWJF支援活動5年を記録したブースも設けられ、ジャズで結ば



れたニューオリンズと東北の子供たちとの「ネバー・エンディング・ストーリー」が掲示されるなど、WJFとの連携もしっかり紹介された。

東北放送が外山夫妻のインタビューを生中継 セインツの演奏も実況、「見ましたよ!」の声も



この前日の10日午後4時過ぎには、定禅寺のメインストリートで東北放送(TBC)がストリートジャズの各会場を生中継する中、外山夫妻とWJFの長年にわたる支援活動や日米ジャズ交流を紹介し、外山夫妻のインタビューも放映。セインツのライブまで3曲も実況(写真上)。翌日会場の各所で「テレビ、見ましたよ!」の声がかかる。

コンサートはもとより子供たちとの再会など、なんとも実りある仙台の「復興LIVE」だった。



WJFの東北支援活動を展示したブースに勢揃いの佐々木さん(右端)と支援スタッフのみなさん＝「復興LIVE」会場で

WJFでは、「復興LIVE」に30万円を支援。千葉君らの東北学院にアルトサクソ、佐々木さんのみやぎ音楽支援ネットワークにトランペットなど楽器3点を寄贈した。

現地ミュージシャンと「サッチモ・サマーフェスト2016」に今年も出演

「夫婦でジャズ50年」、原点のニューオリンズへ2人旅 行く先々で相も変わらぬ熱烈歓迎！新たなドラマも次々と飛び出す

外山喜雄・恵子夫妻は、8月3日午後、成田空港から「サッチモ・サマーフェスト2016」(8月5日～7日)が待つニューオリンズへ旅立った。今年はデキシーセインツのメンバーや「サッチモの旅」の同伴者もなく、のんびりした！?夫妻だけのツアーとなったが、ニューオリンズでの熱烈歓迎ぶりは変わることなく、新たなドラマも生み出した。「夫婦でジャズ50年」にふさわしい1週間のニューオリンズ滞在記を日付順に聞き書きさせていただいた。(小泉良夫)

【8月3日(水)】いよいよ「第2の故郷」ニューオリンズへ

ベタ遅れのデルタ航空、夜11時に現地着 「50周年おめでとう」と、マユミさんが待つ

出発前、恵子さん突然の発熱。なんと39度もあったそうだ。渡米直前の日々に横浜や軽井沢のイベントがあった疲れが出てか“疲労風邪”との診断。抗生物質などを処方して貰いなんとか出発。「それがヒコーキに乗ったら、けろっと治ってしまったんです。日本を出たら気が軽くなったのかしら？」(恵子さん)。

ところが一難去ってまた一難。この搭乗したデルタ航空機がベタ遅れに遅れてシアトルでの乗り継ぎに間に合わず、次の便で



やっとルイ・アームストロング(ニューオリンズ)国際空港へ。午後6時頃の到着予定が、夜の11時頃になってしまった。それでも空港には、「50周年おめでとう」のタブレットを持ったドラマーのまゆみさんが出迎えてくれた(写真左)。

夫妻の宿泊ホテルは、かつてのサッチモの旅で何度も利用したことがある「オムニ・ロイヤル・オーリンズ」。今年のサマーフェスト会場が、フレンチ・クォーター中心部の「ジャクソン・スクエア(広場)」となったため、2ブロック離れた近場の同ホテルがオフィシャルホテルになっていた。

【4日(木)】サマーフェスト・オープニング・ナイト・レセプション

おめでた寸前のベサニーさん夫妻と再会 復興！ジュニアオーケストラの写真を託す

午後1時過ぎから、約2時間、フレンチマンストリートのジャズクラブ「スナッグ・ハーバー」で今回、外山夫妻と共演する「ニューオリンズ・ジャズ・スターズ」とのリハーサル。

メンバーはトーマス・フィッシャー(cl)、フレディー・ロンズ(tb)、リチャード・モートン(b)、ジェラルド・フレンチ(ds)。いずれも浅草のニューオリンズ・ジャズ・フェスティバルに出演するため何度も来日している面々。外山夫妻やデキシーセインツとも、飛び入りを含め、あちこちで共演して喝采を浴びている。みんな旧知のミュージシャンでもあるから、息もぴったりあって本番準備は完璧。

この日はルイ・アームストロングの誕生日でもあり、午後6時30分からオムニ・ロイヤルでサマーフェストVIPの皆さん、ジャズ関係者、ファンらを集めてのサマーフェスト・オープニング・ナイト・レセプションが華やかに、賑やかに開催された。バンドの生演奏(去年はデキシーセインツでしたね)の中、お馴染みのあの顔、この顔に交じって地元WWLテレビ局の人気キャスター、エリック&ベサニー・ポールセン夫妻の姿も。なんとベサニーさんのお腹はポンポンで、はち切れんばかり。おめでたが2ヵ月後に迫



っているとかで、待ちに待ったお子様の誕生を控え、(二回りも年が違う!)お2人は、本当に嬉しそうに外山夫妻と歓談していた(写真下)。

ポールセン夫妻は、東日本大震災のあとウォーカー高校の高校生バンドとティピティナス財団のヤングバンドともども、外山夫妻と東北の被災地を訪れている。ベサニーさんはバンドの引率者、エリックさんはそれに密着取材して、被災地での日米ジュニアバンド交流をテレビの特集番組として制作、しっかり報道してくれている。

外山夫妻はこのご夫妻に、当時、背丈ほどもあるバリトンサクソをティピティナス財団から贈られた石巻ジュニアジャズオーケストラ(スウィング・リバティ・パイレーツ)の女のコ(リコちゃん)が「もうこんなに大きくなっているんですよ」という記念写真を財団へのお礼に託した。会長のカーナトスキーさんには、日程の都合でお会いすることが出来なかったという。会長ご自身のあの可愛いお嬢さんもずいぶん大きくなっているんですよねえ。

おや会場に、サッチモの旅には毎年のように参加している古川博さん(写真左、京都市、会員)のスーツ姿も。サッチモの旅、今年は実施されなかったのだが、古川さんは「私は1人だって行きますよ」と言っていた大のサッチモファン。一次号ご投稿記事掲載一



【5日(金)】 サッチモ・サマーフェスト初日、シンポジウムも開催

LAHMディレクターのリックイーさんが大手柄！ サッチモの貴重なTV映像をすべて入手した

今年も炎天下のサマーフェスト。初日11時からのオープニング・セレモニーに次いで正午からコンサートがスタート。セントルイス大聖堂前のあの広場、第7代ジャクソン大統領が騎乗した勇ましい銅像が中央にデーンと据えられている。その外周左右のテントに外山夫妻らが出演するステージ「Red Beans & Ricely Yours Stage」ともう一つ「Cornet Chop Suey Stage」、さらにフードやビール、サッチモ・サマーフェスト公式グッズ、サッチモ・ブックス売り場などお馴染みのテントが並ぶ(写真下)。聴衆の上は青天井。暑さを避けて木陰に避難する人たちもいっぱい。入場料は5ドルだった。

サッチモ研究やエピソードなどのリサーチャー、研究者、評論家らが、それらの成果を発表するシンポジウムも、会場の向かい側、教会の並びにあるプチ・シアター(La Petit Theatre)で3日連続、延々と続けられた。外山夫妻が驚いた

のは、NYのルイ・アームストロング・ハウス・ミュージアム(LAHM)のディレクターで、サッチモの後半生の活動を克明に描いた秀作「What a Wonderful World」の著者でもあるリックイー・リカルディーさん(写真右上の左、サッチモの旅でLAHMを訪れた方はどなたもよくご存じのはず)が3日連続で“出演”、サッチモのテレビ出演についての克明な解説を続けた。

特に外山夫妻を驚かせ、そして喜ばせたのは、サッチモが1950年代と60年代にアメリカのテレビ局CBSのバラエティー番組「エド・サリバン・ショー」に出演した番組のコピーを長い年月をかけてリックイーがすべて手に入れたこと。元ダウンビート誌の編集長でジャズ評論家、ダン・モーガンスタンさん(写真右上の右)が、以前このショーでサッチ

モがフォスターの「ビューティフル・ドリーマー」(夢見る人＝夢路より)を見たことがあるのを思い出し、リックイーに教えたことがきっかけ。

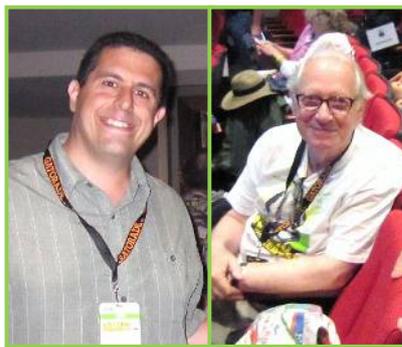
彼の調査が始まり、CBSテレビ局まで出かけて行って探し回った。「あった！」——何とも貴重なこのシーンを見つけたのだ。その“副産物”として、サッチモ出演シーンも次々と発掘していった。

「あの一、これちょっとコピーしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、いいですよ」

「あの一、全部はだめでしょうねえ」

「別にかまいませんけど…」



「やったー！！」というわけ。

このシーンがシンポジウム会場に映し出された。中には、まったく信じられないようなオペラスター、ロバート・メルルとのデュエットやら漫才のような掛け合いシ

ーンまでも飛び出す。

モーガンスタンさんは「ルイ最後の年」を詳報 180人の“サッチモ称賛の声”を誕生プレゼント

モーガンスタンさんも、シンポジウムで「ルイの最後の年」と題する講演をした。彼はアメリカ中の雑誌に掲載されたサッチモのすべての記事と細かいコピーを1970年のサッチモの最後の誕生日(1971年没)にサッチモに贈った。そこにはマイルス・デーヴィスの「ルイがいなかったら、いまの私は存在しない」といったような180人もの著名なミュージシャンらのサッチモを巡る驚嘆の言葉が羅列されていた。サッチモはこの“贈り物”に返事を書いている。「いやあ、あれにはまったく、のけぞるほどおたまたげたよなあ」と。

そして、サッチモが他界した時の生まれ故郷ニューオリンズ市をあげて悲嘆にくれた模様と、何とも寂しかった居住地ニューヨークでの葬儀のあまりの違いにも触れていた。

外山夫妻は、息をのんで脇目もふらずシンポジウムの会場を回った。「サマーフェストは、毎年素晴らしい音楽とセミナーを聴かせてくれますねえ。今年はサッチモの旅が実施できず、みなさんには申し訳なかったんですが、その分、2人であれこれしっかり胸に刻み込ませていただきました」と夫妻。まあファンからの金婚旅行のプレゼントでしょう。

【6日(土)】Yoshio & Keiko Toyama and New Orleans Jazz Starsが熱演

ピート・ファウンテンの急逝に捧げて「小さな花」 宇都宮からの高額寄贈もステージで紹介される

いよいよサマーフェスト2日目、午後3時45分から「Yoshio & Keiko Toyama and New Orleans Jazz Stars」のステージ。演奏曲目はあのボーカル・スキャット誕生シーンを再現した「ヒービー・ジービーズ」「ポテト・ヘッド・ブルース」「ウエストエンド・ブルース」「マホガニーホ

ール・ストンプ」「ダイナ」など、1時間半の熱演が続いたが、中でも聴衆に感銘を与えたのはフィッシャー(c1)をフィーチャーした「プティット・フルール(小さな花)」だったかも知れない。というのもこの日朝、それこそニューオリンズを代表するジャズの伝説的クラリネット奏者、ピート・ファウンテンの訃報が伝えられてきたからだ。この曲は彼へのトリビュートだった。

会場の若い女性グループから思わぬ声援が飛んできた。彼女らの話によると、一行5～6人はケンタッキー州からやってきたという。一行の1人が以前、サマーフェストでセイントの演奏をきいて熱烈ファンになってしまい、友人を誘って再びニューオリンズにやってきた。後日、一行の1人、サマンサ・グラハムさんという方から外山夫妻のもとにiphoneで撮ったバンド演奏のビデオが送られてきている。

演奏に先立ってニューオリンズのジャズ博物館(ルイジアナ州立博物館分館)名誉館長、ドン・マ



サマーフェスト会場で演奏する外山夫妻 = Demian roberts さんのfacebookから



ジャズ博物館名誉館長、マークスさん(右)に目録を手渡す

ルキさんがステージにのぼり、夫妻からジャズ博物館とランドリー・ウォーカー高校へ各2000ドルの寄贈があったことを聴衆にアナウンスし、盛大な拍手を受ける。この寄付金は吉原郷之典さん(うつつのみやジャズの街会長、スウィングインハードオーケストラ・リーダー、tb)と彼の指導している「うつつのみやジュニアジャズオーケストラ」が、2005年にニューオリンズを襲ったハリケーン大災害の直後から、コンサートの度に支援の義援金を募り、長年WJFに送金してきて外山夫妻が積み立てていたもの。マルキさんは大感激し、もうだいふお年を召されていて、両手のステッキを頼りにおぼつかない足取りながらステージにのぼってこれ、ジャズ博物館への心温まる寄贈を聴衆に紹介してくれた。

【7日(日)】セント・オーガスチン教会でジャズ・ミサ&プリザベーション・ホールへ

ヒゲ面のジョン・マイケルがミサで外山さんと共演 “Satchmo Salute”セカンドライン・パレードも

今年も午前10時から、シドニー・パーシエも通っていたトレメ地区のセント・オーガスチン教会でジャズ・ミサが営まれた。例年のように地元聖歌隊とトレメ・ブラスバンドが音楽を担当。外山さんもこのブラスバンドに加わって高らかにトランペットを聖堂に響かせる。と、その外山さんの隣にトレメ・ブラスバンドの帽子をかぶって、口ひげとあごからもみあげまで黒々と連ねたひげ面の若者もトランペットを吹き鳴らしている。ん? あれ?! なんとジョン・マイケル・ブラッドフォードだったんです(写真右)。東日本大震災後の被災地巡りにティピティーナス財団から派遣されてきた当時の高校生のような風貌とはまたすっかりイメージが変わってしまった。

サマーフェスト最終日のグランドフィナーレとなる、この日夜のサッチモへのトランペット・トリビュートには姿を見せなかったが、思わぬ所で外山夫妻と昨年のフェスト以来の再会を喜び合う。午前11時半、ジャズ・ミサのあと2人はトレメ・ブラスバンドとともに、もみくちゃんになって教会から姿を見せ“Satchmo Salute”セカンドライン・パレードに飛び込んでいった。

「あなた方はワンダフル・ワールドの方？」 サックスを寄贈されたという若者が名乗り

フェストが一段落した夜、外山夫妻はゆったりした気分ですりぞき、プリザベーション・ホールを訪れた。ちょうどウエンデル・ブルーニャス(tp)のバンドが出ていて、外山さんはステージに呼ばれ「I Can't Believe that You're in Love with Me」と「南部の夕暮れ」の2曲を演奏。ステ

ジが終わったとき、横でテナーとソプラノサックスを吹いていた若者が外山夫妻の所にやってきて「あなた方はワンダフル・ワールド?」と訪ねてきた。「そうだよ」と外山さんが応えると、この若者はパツと顔を輝かせて、にっこり微笑みながら「2001年に私はあなた方からテナーサックスを頂いているんです」と。「うーん、2001年!?!」外山さんはちょっとの間、記憶をたどっていた。

<確かあの年、2001年はNOCCA(ニューオリンズ総合芸術センター)に関係して学校でミュージック・プログラムを実施していたミュージシャン、ジョナサン・ブルーム(ds)を訪ねて楽器を贈った年。そこには当時13歳のトロンボーン・ショーティーもいて楽器を受け取っている。そこに彼はいなかったはず。その後、おそらくNOCCA通じて楽器を受け取っているのかも知れない>

彼の名前は、カルビン・ジョンソン。いまやプリザベーション・ホールのレギュラー・プレーヤーとして活躍している(写真左)。とても伝統的な素晴らしい演奏を聴かせて



いた。なんと、ここプリザベーション・ホールの往年のスター・サクスマン、ラルフ・ジョンソンの甥御さんでもあった。

「私は日本から贈られてきたヤマハのテナーサクスを頂いているんです。そのケースに貼られていたステッカーの“Wonderful World”という文字をいまでもしっかり覚えていてます。ただ残念なことにハリケーンの被害にあって壊れてしまったんです」と。でも外山夫妻に会えて本当に

嬉しそうだった。

前述したトロンボーン・ショーティーは、オバマ大統領夫妻の前でB. B. キングらと一緒に演奏したり、いまは自らも子供たちの音楽教育に携わったり…と、外山夫妻の撒いた種があちこちですくすくと成長して、花を咲かせ、果実を实らせている。何か涙が出てきそうな“夫婦でジャズ50年”となった。

【8日(月)】ローリンズ先生の待つランドリー・ウォーカー高校へ

新学期初日の高校でバンド部員が大歓迎 ここでも宇都宮からの2000ドルを手渡す

ニューオリンズ出発前日のお昼過ぎ、最後の訪問地、ウィルバート・ローリンズ先生の待つランドリー・ウォーカー高校へ。夫妻はリバーウォーク近くのキャナル・ストリートにあるフェリー乗り場からミシシッピ河対岸のアルジェへ出て、とても暑い日だったが、そこからは徒歩で高校に向かう予定にしていた。ウィルバート先生に伝えると「とんでもない！ すぐに迎えの車を出します」と。フェリーが着くと、待っていたのはタクシーだった。このドライバー、ケネス・フィールドさんはまさに天真爛漫の超ハッピーな人。数分のうちに、彼がローリンズ先生の親しい友人で、G. W. カーバー高校の出身、トランペットを吹き、娘さんはランドリー・ウォーカー高校でローリンズ先生のバンドにいて彼はPTA、以前、ティピティナス財団会長宅のパーティーでは、夫妻やサッチモの旅の一行とも同席している…など。

いつも外山夫妻を取材してくれている地元タイムズ・ペ

【9日(火)】感動の1週間を終え帰国の途に、無事、成田空港に帰る

無事帰国の途へ。ところが、デルタ航空が乗り継ぎのロサンゼルス3時間遅れ。それでも1時間ほど遅れて成田着。

キューン紙のシーラ・ストラウブさんも、今年金婚式を迎え、同紙に名コラムを掲載しているが、ご主人(元デルタ航空パイロット)の体調が悪く、それにかかりっきりでお会いできなかったが、外山さんはシーラさんへの祝福と励ましのメールの中で「もし悲しいことがあったら、この男に会うといい、きっとハッピーな気分になりますよ」とまで伝えているほど。

ランドリー・ウォーカー高校では、今回は特別な歓迎セレモニーは予定されていなかったが、ちょうど新学期最初の登校日とあって、ローリンズ先生始め、ブラスバンド部員、それに新しく赴任した校長先生のタイロン・キャスビーさんがバンドルームに揃って出迎えてくれた(写真左)。ここでも宇都宮から贈られた2000ドルを寄贈。

ローリンズ先生のグラミー賞候補の話もみんなにきかせてあげたあと、マイクを取って「この素晴らしき世界」歌うと、生徒たちはさっそくセカンドラインで歓迎して

くれた。

帰りのタクシーは、また例のハッピー・ドライバー、「なに、明日帰るの？ じゃあ、私が空港まで送って行ってあげますよ」。

ほっと一息は付いたものの、まだまだ次々とイベントやコンサートが待っていたのです。

「夫婦でジャズ50年」実り多い1年を振り返って

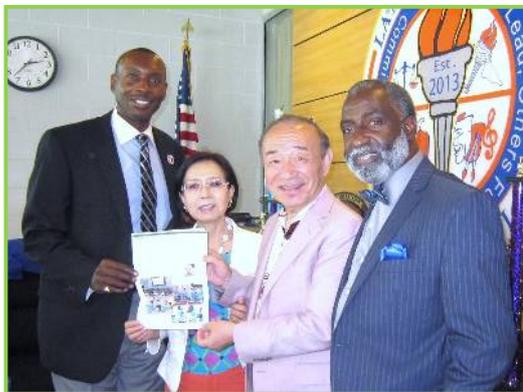
今年“私達夫婦で活動させていただき50年”という節目の年を、多くの皆様にお祝いして頂きました。心より感謝しております。その後、さらに嬉しい出来事が続き、ここに皆様にご報告させていただきます。

ひとつは、今年8月ニューオリンズを訪れ2016年サッチモ・サマーフェストに夫婦で出演したこと。さらにプリザベーション・ホールで演奏した際、共演した現在活躍中の若手ジャズマンが2001年、日本レイ・アームストロング協会が贈った楽器を手にし、音楽の世界に入ったことを、本人から感謝をこめて告げられたことです！

また、2011年、東日本大震災の津波で楽器をなくした子供たちにニューオリンズからの楽器を届け、今年で5年目にあたります。世界一とも

いえるジャズの大イベントとなった定禅寺ストリート・ジャズフェスティバルで、子供たちのバンド復活から5年目の特別イベントを開催したいと思っていました。仙台であるジャズマン人形を販売ニューオリンズへの寄付を送り続けて下さった佐々木孝夫さん(写真=みやぎ音楽支援ネットワーク、ジャズカフェ・ジャズミーブルース nola 店主)にご相談し、W J F 協賛のもと、佐々木さんのご努力で復興支援ライブ開催の夢が実現、震災後、楽器を贈った子供さんたちの5年後の成長した姿にふれることが出来たことは本当に嬉しい出来事でした。セインツのステージでは2011年、多賀城の小学生バンドを出て中学校に上がったばかりだった少年トランペッター、千葉隆老君と同級生の友人の櫻井龍太君との共演も実現しました！！

(外山喜雄・恵子)



横浜ちぐさでの「夫婦でジャズ」4回シリーズを華やかに締めくくる
「聖者の行進」にのって歌う～サッチモの一生の物語～
 セインツ、サファリデュオ、BULL松原…次々と登場、夫妻を支援

「ちぐさでジャズ探検隊」の4回シリーズで開催された外山喜雄・恵子夫妻の「夫婦でジャズ50年」、前号(会報90号)の1～2回に続いて後半3～4回の模様をお伝えします。第4回は最終回にふさわしく、夫妻だけのトークショーにとどまらず、次々と支援ミュージシャンも登場し、華やかな最終回を締めくくった。

第3回は7月25日(月)、ジャズ喫茶ちぐさで再開。テーマは「サッチモが始めたジャズの事始 スキヤット」。先に銀座十字屋ホールで開催された『春のシュビドゥバ』のいわば外山夫妻によるトーク編。1926年2月26日、シカゴのOKeyレコード吹き込みスタジオでサッチモ率いるホット・ファイブが「ヒービー・ジービーズ」を録音中に歌詞の書かれた譜面を落とし、とっさに発した♪シュビドゥバ…。



これが大ヒットして瞬間に世界中に広まっていった“ジャズ界の2.26事件”、今年はその90周年でその後のエピソードなども語り継がれていく。

午後2時開演。その前からちぐさご自慢の超高級オーディオ・サウンドに耳を傾けるお客さんも少なくない。この日かけられていたLPレコードは「Louis Armstrong & Duke Ellington」。ルイの声が艶やかに聞こえてきて、これを聴いただけでも、なにやら得してしまった感じ。そのジャケットの前で、もう外山夫妻とは“以心伝心”というボランティア・スタッフ、山口誠之さんの司会で開演(写真上)、さっそくこのLPから「ザ・ビューティフル・アメリカン」でスタート。ついで「Ella-Louis/PORGY & BESS」から「サマータイム」など、さらにサッチモが晩年テレビ出演して、司会者らに囲まれて座りながら静かに熱唱した「ホワット・ア・ワンダフル・ワールド」、「I Can't Give You Anything But Love(捧げるは愛のみ)」などサッチモにいたる歌い方の変遷などが続く。

そして出ました！「ヒービー・ジービーズ」。外山さんが譜面をもって実演し、恵子さんがバンジョーを奏でる(写真上の中央)。いつもならセインツのメンバーの一人がさっと拾い上げるのだが、この日はお客さんの前にひらひら…なかなか拾っ

てもらえない。外山さんのスキヤットはかなり長引いたのでは？ シカゴでの爆発的なヒットが、やがてグローバルなブームを巻き起こす、あの人も、この人も♪シュビドゥバ…ボズウェル・シスターズ、ビング・クロスビー、ミッキー・マウス、エラ、サッチモとディジー・ガレスピー、そんな映像が映し出されたが、とてもすべては紹介しきれませんね。サッチ

チモが一番好きだったという1931年の「スターダスト」も登場した。踊る骸骨との共演も。



映画「上流社会(High Society)」では、外山さんが恵子さんのピアノの伴奏で「ハイ・ソサエティー・カリブソ(High Society Calypso)」を歌って魅せてくれた。1940年、服部良一作曲で“ブギの女王”笠置シズ子が歌った「ラッパと娘」など、日本のジャズへの影響にまでトークが及んで、第1部を終了。



「これ、これ…これと同じタイプなんです」と外山さんのトランペット収集談義も飛び出す

第2部は、外山さんの楽器収集から始まった。最初は、師のキング・オリバーと並んでサッチモが手にしているコルネットと同型のもの。「昔はバイオリンとの共演が多く、A管とB♭管可変なんです。これを買って家内に大分叱られました」と笑わせたあと、吹いて聴かせてくれた。あとで恵子さんに伺うと、「あの話が出るたびにムッとするんです」。値段なんて教えてくれませんでしたよ

と苦笑い。お次の1本も、A管にもなりバイオリンとも合うというブッシュャー社のトランペットで「ポテト・ヘッド・ブルース」を披露。何やら細長いトランペット(CGコーン社製)も登場し「スターダスト」。まだあるんです。サッチモが晩年、亡くなるまで使っていたのと同型の仏セルマーのペットで「南部の夕暮れ」。

サッチモのボーカルはハワイアンに移り「小さな竹の橋」。サッチモはこの歌で始めて歌い後にサッチモのトレードマークとなった節がとても気に入っていて、2回も繰り返し歌ったあと、



と、トランペットに入る。アンディ・イオナとの共演、後年はカントリーに入ってギターとも共演している。サッチモはジャズに限らず、誰とでも、



どんな音楽にも溶け込んでいって、楽しさを広げていってくれる。そんなサッチモの世界を、サッチモに心酔している外山夫妻が次々と再現してくれた。まさに夫妻ならではの企画。

最終回は定員倍増のHANAHANAで

いよいよ最終回、第4回は8月31日(水)、場所を「ちぐさ」のお隣のイベントホール「HANAHANA(ハナハナ)」に移しての公演。募集人員も25人から80人にふくれあがって、サッチモファン、外山喜雄・恵子ファンが会場を埋めた。今度は夫妻だけでなく、デキシーセイッツの面々も応援に駆けつけた。いつものようにボランティア・スタッフ、山口誠之さんの司会でスタート。まずはこの4回シリーズ皆勤賞の9人に「ちぐさでジャズ探検隊初級隊員証」の贈呈が紹介された。



今回も外山夫妻への花束贈呈(写真右)があり、次いでWJF会員の皆さんにはおなじみの映像「Satchmo the Great(サッチモは世界を廻る)」(1956)やベトナム戦争の最前線に向かう兵士たちの前で歌うサッチモの映像が次々と大型スクリーンに映し出された。これらの映像は何度見ても、その都度、新たな発見、新たな感動が不思議なくらい生み出されてくる。



もう1本、なんとも感動的な映像。サッチモが亡くなる5カ月前の英テレビ出演「デイビッド・フロスト・ショー」(1971年2月10日)で、トランペットを手にしたサッチモが「聖者の行進」のメロディーをバックに自らが最後に歌いかける「ボーイ・フロ

ム・ニューオリンズ～サッチモの一生の物語～」。

恵子さんがこの映像を見て「何としてみても私が日本語にしたい」と、あの難解なダミ声聞き取って、美しい詩に翻訳した。結構長いので、かなり割愛させていただくが、こんな風に始まる。

生年月日は彼が生前、信じていた日付。

私が生まれたのは、その昔、1900年7月4日
それは裏町のジーンズ横丁
ニューオリンズ生まれの一人の少年のお話し
(…に始まり、こう締めくくる)

そう、最後に皆さん、……

私のはるばる来た道は、
本当にすばらしく、楽しいことばかりだった。
神さま、心から感謝します。
そして、皆さん本当にありがとう。
皆さんは、この“サッチモ爺さん”にとっても親切でした。
この年をとった、ニューオリンズ生まれの
‘グッド・ルッキングな少年’にね！

恵子さんはこの詩を全文朗読。この日は、ピアノ&バンジョーに“詩の朗読”という演技まで加わった。

休憩をはさんで第2部は、セイッツの演奏。このシリーズ初めて広津誠、粉川忠憲、藤崎羊一、サバオ渡辺の全メンバーの出演。「南部の夕暮れ」、「バーベキュー料理で踊ろうよ」、「明るい表通り」、バンジョーが加わって「ヒービー・ジービーズ」、「テネシー・ワルツ」、そして「リパブリック賛歌」(写真①)。ここでなんとあのサファリ・パーク・デュオが飛び入りのサ

プライズ。お姉さんの野村琴音さん(高3,tp)、弟の郷詩君(中1,p)の天才デュオ(写真②)。郷詩君はずいぶんと背が伸びてお姉さんを追い越した。元気にカズーまで鳴らしてピアノを弾く。はきはきと曲目を紹介、「ラストダンスは私に」と「インディアナ」(これにはセイッツも加わって再演)。

おや、サプライズがもう一つ、ボーカリストのBULL松原さんの登場(写真③)。ど迫力の「聖者の行進」と「この素晴らしき世界」を外山さんともども聴かせてくれた。「ハロー・ドーリー！」とフィナーレは「聖者の行進」で会場をパレード。終演時間は午後4時とあったが、40分も超過して、華々しく4回シリーズの幕を閉じた。

『ジャズを求めて60年代ニューヨークに留学した医師の話』

おめでとうございます！「中村宏さんの出版をお祝いする会」

新橋のカフェ・コトクラブに120人を超えるみなさんが参集

私たち日本ルイ・アームストロング協会の顧問というか、名誉会長的な存在の中村宏さん(ジャズ評論家、防衛医大名誉教授)の著作『ジャズを求めて60年代ニューヨークに留学した医師の話』(DU BOOKS)の出版祝



賀会「中村宏さんの出版をお祝いする会」が7月24日(日)、東京・港区新橋のカフェ・コトクラブに、医学界、ジャズ界、ジャズファン、WJF 会員ら120人を超えるみなさんが参集、心を込め和やかに開催された。

開場は午後1時半だったが、もう1時過ぎから長蛇の列で開場を早めざるを得なかったほど。すぐに各種飲み放題のドリンクサービスが始まる。午後2時、ジャズ・プロデューサー、小針俊郎さん(「24JazzJapan」などのレーベル取締役)と富樫佳子さん(慶応軽音楽鑑賞会=KKK1期生)の軽妙な司会で開演。発起人を代表して佐藤修さん(ポニーキャニオン社長、日本レコード協会会長など歴任)=写真右=のご挨拶、村井勝さん(慶応大学教授、同病院院長など歴任)のご祝辞、瀬川昌久さん(ジャズ評論家)の乾杯ご発声=同右下=…もう、みなさま大変な肩書きの方ばかりで、役職などすべてはとでも書ききれません…中村さんならではの人脈…で中村さんの謝辞と続く。



佐藤さんのご挨拶にもありましたが、“中村先生の祝賀会”とあっては、もう何人集まるか分からず、主催者側は涙をのんでご参加を130人ほどに絞らせていただいたとか。医学関係者が約半数、ジャズ関係者とサッチモの旅などで先生とご一緒したお仲間が半数。会場に座りきれず、立ち見、立食となった方々には、お詫びせざるを得ません。

賑やかな歓談の中、著書に使われた各種写真の説明を中村さん自らがスクリーンに映し出された画像を見ながら、司会者と進めていく。そんな中で何よりも驚かされたのは、幼少のこの1枚。着ているセーターの胸にすでに「KEIO」の文字(写真右上の上段)。聞くところによると、既にお母様が「KEIO」と決めていたそうなんです。ニューヨークの海水浴場、

コニーアイランドでの美代子夫人の素敵なスナップも見逃しません(写真左の下段)。中村さんのNYでの生活も次々映し出



される。最後の“ニューヨークのため息”ボーカリスト、ヘレン・メルさんとのNYでのディナーの集合写真(ヘレンさん曰く“Japanese Gang”たち)も中村ご夫妻のお人柄を偲ばせる(次ページ下段)。

(写真上の中央は、WJFからのフラワー・スタンド)

ここで外山喜雄とデ

キシシーセインツのお祝い演奏。外山喜雄・恵子夫妻と広津誠(c)、粉川忠範(tb)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds)による「セ・シ・ボン」に始まり、小川理子さん(p,vo=パナソニック役員！)を加えての「ポテト・ヘッド・ブルース」(中村先生最愛



の曲)、さらに鈴木孝二さんを加えて理子さんのボーカル「サマータイム」の熱唱(写真左)。この間、恵子さんはバンジョーに移る。最後は「聖者の行進」でブラス

と恵子さんが場内を回る。医学界の錚々たるメンバー、ジャズ評論家のみなさん、KKK仲間、サッチモの旅仲間…みなさんが惜しみない拍手を送る。中村さんの本の中に登場している方々

も多数おられた。

外山さん始め、孝二さん、粉川さん…セインツのメンバーの中には、“医学的”にも、中村さんのお世話になっている。そして孝二さん、中村さんが2度目のアメリカ留学時の1967年7月2日、ニューポート・ジャズ・フェスティバルに日本のビッグバンドとして始めて出演した原信夫とシャープス&フラッツの一員として参加し、中村さんは著書の中で「アルトの鈴木孝二のソロも軽快で…」

と書かれている。その孝二さん、「あとで知ったのですが、まさかあそこに中村先生がいらっしやっただとは…」。

バンド演奏が終わったところで“飛び入りスピーチ”、まずは石井一さん(自治大臣など歴任)。1953年11月。ノーマン・グランツ(米プロデューサー)率いるJATPメンバー30人超が

来日した際、羽田から銀座までのオープンカー・パレードで先頭車を運転していらっしやる。この来日が日本におけるジャズの大ブームのきっかけとなっている。「私は政治とジャズの二足のわらじを履いてきました」。田中角栄元総理のロッキード事件に側近中の側近として奔走した際の秘話をまとめた近著『冤罪－田中角栄とロッキード事件の真相』(産経新聞出版)もしっかりPR、中村さん

にプレゼントされた。ついで玉置憲一さん(東海大学医学部教授、医学部長など歴任)。「本を読んでいて涙が出そうになりました」と。そう、「とても興味深く一気に読んでしまいま



磯野博子さん、佐藤美智子さん、石井一さん(写真左から)



した」という方々も少なくありません。受付横での同書の販売も順調で中村さんのサイン会ともなっていた。

午後4時前、佐藤修さん、故いソノテルヲ夫人の磯野博子さんによる中締め。そして花束贈呈は、中村さんの学生時代、医学部講師もさ

れていたジャズ評論家、牧田清志さん(ペンネーム=牧芳雄、後に東海大学医学部教授)のご令嬢、渡邊玲子さんと佐藤修夫人で中村ご夫妻とサッチモの旅でいつもご一緒されている佐藤美智子さん。中村夫妻の笑顔がこぼれ

る(写真上)。

ニューヨークのヘレン・メリルさんから中村さんへの素敵なお祝いメッセージが読み上げられた(下段、日本語訳は最終面へ)。

いよいよ終演。「先生ご夫妻は、ほんとうに嬉しそうで、会のお最初のお客様のお出迎え、終了後のお見送り…と結婚式の

様に、誠意に満ちた対応をされていました」と外山さん。

本当におめでとうございます。私たちWJFも、心からお祝い申し上げます。

(小泉良夫)

My friend, Dr. Nakamura,

-it is rare when you have a deep friendship with such a wonderful human being..always there to help and add a smile to my face..

Sensei, has been available to me on so very many many occasions..from helping me with minor health problems to those more potentially serious..Always ready to answer my questions.

best of all, he and his wife Miyoko- san have attended almost all of my performances ..which always made me feel proud..

We also created a group of friends that we good naturally call 'our gang' We start at my house then go to a restaurant , This all happens before their yearly trip to New Orleans where they, with Toyama san and group, distribute trumpets to young musicians there, who are in need...'Our gang' means a great deal to me.

Although I cannot read Japanese, I will have my friend Katherine ..who is now in New York, translate the portion of the book that relates to me. I am seeing her tomorrow..Most of you know this young woman who is a student ay Columbia U...and has her own Jazz radio show..

Once again, my best wishes for a great success with your new book..I am honored to be part of it..

With great fondness,

Your friend and admirer,

Helen Merrill

愛知・岡崎にジャズあい!

内田修ジャズコレクション—三浦健仁



はじめまして。私は愛知県岡崎市役所の職員です。私がサッチモことルイ・アームストロングの音楽に出会ったのは1980年代。映画「グッド・モーニング、ベトナム!」のテーマとしてリバイバルヒットしていた「この素晴らしき世界」。

どんな過酷な状況であろうと、音楽は人をあたたかく

包み込むことができるんだ!と強く心を動かされました。

このたび、日本ルイ・アームストロング協会の皆様に私の職場、しかもぜひ訪れていただきたい「日本ジャズの情報拠点」を紹介いたします。

徳川家康公の生誕地、岡崎市は、愛知県の中央部、名古屋から鉄道に乗り、30分くらいの地点に位置しています。今年市制施行100周年を迎えました。

そんな岡崎で、数年前から使われ始めたキャッチフレーズが「ジャズの街岡崎」。横浜や神戸ではなく、岡崎がジャズの街???と思われるかもしれませんが、実はジャズの貴重な資料を常設展示しているスペースがあるのです。それが「内田修ジャズコレクション展示室」(写真上中央)。2008年11月、市営の複合施設「図書館交流プラザ」内にオープンしました。「ドクター・ジャズ」こと外科医の内田修さん(写真左上)から岡崎市に寄贈された、2万枚近くに及ぶレコードやCDはじめ、オーディオ、楽器、雑誌、書籍、プライベートテープといった一大資料群の一端が展示紹介されています。水曜日を除く毎日(午前9時から午後9時まで、入場無料)営業し、金・土・日曜日にはリクエストを受け付け、ヴィンテージ・オーディオでレコードを聴くこともできます。

では、この膨大なコレクションを一代で築き上げた「ドクター・ジャズ」のプロフィールを紹介しましょう。

内田修さんは1929年生まれ、岡崎出身。戦後間もない頃、最初に買ったジャズレコードが、日本コロムビア制作の12枚組SP「ジャズの歴史

HISTORY OF JAZZ」。デキシーからスイング、ビッグバンド、モダンまでを網羅したこのレコードを擦り切れるほど聴いたことで、ジャンルにとらわれず、いいモノはいいと分け隔てなく聴けるようになったそうです。外科医として多忙な毎日を送りながらも、1963年にジョージ・ルイスの楽団が来日した際は、外国人ということで満足な医療を受けられない彼らのために、主治医役をボランティアで務めました。また、まだ海外旅行が珍しかった時代にアメリカを訪問してせっせとジャズクラブに通い、チャーリー・ミンガスやジョン・コルトレンなどの演奏を間近で体験しました。秋吉敏子、渡辺貞夫、日野皓正など、今や日本を代表するミュージシャンたちを若い頃から物心両面で支援したり、1960年代から90年代にかけて、主に名古屋を舞台にさまざまなライブを企画し活動の場を提供したりするなど、まさにジャズとともに歩む人生なのです。

外山さんご夫妻との関係では、著書「ニューオリンズ行進曲」の出版の裏には内田さんの激励があったとか。2013年、ご夫妻にはジャズ講座を岡崎で行っていただき、まだ日本語字幕制作途中だった「サッチモは世界を廻る」を一部上映して内田さんと再会。旧交を温められました。

内田修コレクションは、内田さんのジャズを通じた交流の賜物です。特にプライベートテープは、1960年代以降の日本のジャズの歩み

を記録した貴重な音源で、4年前からその一部をCD化して販売し、より多くの人々に聴いていただいています。遠方にお住まいの方には、Eメールでの注文も承っています。詳しくはこちら(<http://dr-jazz.jp/cd/>)をご覧ください。またジャズコレクション展示室では、10月22日(金)から11月20日(日)まで、写真家で新宿DUGのオーナー、中平穂積さんの作品展「ジャズの街角IV中平穂積写真展」(写真下)を開催しています。中平さんと内田さんとは、1966年のニューポート・ジャズ・フェスティバルを一緒に訪れた仲です。展示の詳細は、こちらをご覧ください。

(<http://dr-jazz.jp/jazzmachikado/>)皆様のお越しをお待ち申し上げています。

秋の岡崎は、岡崎ジャズストリートをはじめ、さまざまなイベントが目白押しです。ぜひ一度、足を延ばして愛知・岡崎へ!



特別版「JAZZ NIGHT for KIDS」 銀座三越で子供たちとクールな夏休み

“ジャズに出会える、週末のぎんみつ”をキャッチに毎週金曜午後、銀座三越の9階、銀座テラスで開催されている「JAZZ NIGHT」、8月19日の「for KIDS」2ndステージは、外山喜雄とデクシーセインツを迎えてのコンサートとなった。

子供とジャズ!?!と、いぶかることもない。東京ディズニーランドでのセインツ23年、子供たちを楽しませてきた実績を考えれば、納得!と頷けるに違いない。午後3時開園時には、予想通り子供たちが前列びっしりと埋



めてしまった。付き添いの親御さん、セインツの追っかけファンにとっては、この上ないサービス、ナゲット&ポテト&生ビールのお得なジャズ・ナイト限定セット(1セット税込み1000円)が待っていた。



出演は、外山喜雄・恵子、広津誠、藤崎羊一、サバオ渡辺のセインツ・レギュラーメンバーに松本耕司(tb)。ディズニー曲「ビビデバ

ビデブー」やら子供に指揮棒を持たせて指揮を取って貰ったり(メチャ早く振ってたなあ)、バンジョーをフィーチャーした「テネシーワルツ」、「この素晴らしき世界」、サンバの曲も出て、バラエティーの富んだ演奏。アンコールがあって、ここは「アナと雪の女王」でたっぷり45分を締めくくった。

三越もなかなかCool!ですね。

ジャズは下町の夏の風物詩 浅草ニューオリンズフェスティバル

もうすっかり浅草の夏の風物詩となっている『浅草ニューオリンズフェスティバル』(協同組合・浅草おかみさん会主催)が、今年も8月24、25の両日、東京・台東区の浅草公会堂で開催された。今年は数えてもう30回にもなったといい、会場は相変わらず熱心なファンで埋め尽くされ、トーマス・フィッシャーとニューオリンズジャズオールスターズ、そして外山喜雄とデクシーセインツの熱演に酔いしれた。

両日とも、午後2時と同6時半開演、昼と夕刻の2回公演。まずは、デクシーセインツでスタート。メンバーは外山喜雄(tp, vo)・恵子(p, bj)、広津誠(cl)、粉川忠範(tb)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds)のレギュラー陣。25日夕は、「バーボンストリート・パレード」で幕開け、「セ・シボン」、広津さんをフィーチャーした「鈴懸の道」、恵子さんのバンジョーで「世界は日の出を待っ



ている」、「この素晴らしき世界」を好演、15分の休憩を挟んで、いよいよジャズオールスターズの登場。

メンバーは、今年もう19年目になるというリーダーのトーマス・フィッシャー(cl)、ニール・ウンタシエア(bj)、リチャード・モーテン(b)、トーマス・フック(p)、チャールス・ファディラ(tp)、デイビッド・ハリス(tb)、ジェラルド・フレンチ(ds)、ヨランダ・ウインジー(vo)。毎年のように来日し、チラスにもメンバー

として紹介されていたフレデリック・ロンゾ(tb)は、プリザベーションホールの仕事の関係で来日できなかったという。

「ダイナ」、「ルート66」、「アイ・レフト・マイ・ハート・イン・サンフランシスコ」、「A列車で行こう」…女性歌手のヨランダが素晴らしいボーカル

を聴かせてくれた。「峠の我が家」、「ダウン・バイ・ザ・リバー・サイド」、「アマポーラ」、「マイ・ブルー・ヘブン(私の青空)」…ピアニストが日本語でしっかりと歌う。そして「プティット・フルール(小さな花)」、アンコールで飛び出した「スキヤキソ

ング(上を向いて歩こう)」は会場も巻き込んでの大合唱となる。フィナーレはもちろん「聖者の行進」。セインツのメンバーも加わって会場をパレード、セカンドラインが続き、今年も素晴らしい幕切れとなった。(上記の写真はいずれも奥村清文撮影)

**ご寄付と嬉しいお手紙
ありがとうございます**

- ◆飯窪敏彦様(会員、杉並区) トランペット
- ◆村中嘉代子様(名古屋市) フルート
- ◆内藤壽昭様(会員、世田谷区) 3万円
- ◆寺田繁様(オーディオパーク) 8万円

ご出版おめでとうございます！ジャズ歌手 ヘレン・メルルさん
マイ・フレンド ドクター中村

いつもそばに寄り添ってくださっていて、考えただけで笑顔になる方。

そのような素晴らしい人間味溢れる方にお会いし、深い友情で結ばれることは、めったにあることではありません。センセイには、ちょっとした健康の問題から、少し深刻になりかねないケースまで何かとご相談し、いつも的確なご指示をいただき本当にお世話になっています。

それにもまして、先生と美代子奥様は、わたくしの(日本での)公演をほとんど全部聴きにいらっしゃって下さって、本当に私はプライドに感じています。

また、私達には心を込めて“私達のギャング”と呼んでいる友達グループも生まれました。

まずニューヨークの私の家に集まってからレストランへ行きます、、、毎年皆さんは、外山さんのバンドとのツアーでニューヨークを訪れ、恵まれない若いミュージシャンに楽器を寄付されています。その前後にニューヨークにいらっしゃるのです。

“ギャング”は、本当に私にとって素晴らしい、無くてはならない大切な“仲間”となっています。

残念ながら私は日本語が読めませんが、ニューヨークに住む友達のキャサリン(カット)に明日会うので、ご本の中の私に関する部分を訳してもらいます

彼女は、コロンビア大学の若い女学生で、自分のラジオショーも持っている人です。

最後に、本当にご出版を心から喜んでおります！おめでとうございます。

このニューブックがグレート・サクセスとなることを祈っています。

また、祝辞をお贈りさせていただき、大変光栄に思います！

先生を尊敬する、先生の友人
ヘレン・メルルより

(外山訳)

The Satchmo of Japan, and his Queen of 50 years

7面でもご紹介したニューオリンズの陽気なタクシー・ドライバー、ケネス・フィールドの娘さん、デスティニー(写真下の右)は絵が得意だそうで、こんな絵を描いて、送ってくれました。

タイトルは「The Satchmo of Japan, and his Queen of 50 years」

何とも微笑ましい記念すべき「夫婦でジャズ50年」でしたので、ここに掲載させていただきました。彼女、気の毒に、難病で苦しんでいるようです。
(外山喜雄・恵子)



募集中

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい！！

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

＝WJF年会費＝

- 一般会員(General Membership) ¥6,000
- 学生会員(Student Membership) ¥3,000
- 賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行浦安駅前支店

普通:5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは:WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Google で

<検索>ルイ・アームストロング

<http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf>

各地のジャズ・イベントに外山夫妻は精力的に出演。ニューオリンズでのサッチモ・サマーフェストには金婚旅行をかねての参加。旧友たちとの再会の喜びと予期せぬ出会いが1週間の滞在に記されています▼15年前にWJFからテナー・サクソスを贈られた少年カルビン・ジョンソン君がプリザベーション・ホールの新進のレギネラー・プレイヤーとして活躍しており、立派に成人した彼が、外山夫妻に初めて会い感謝の言葉を述べたエピソード。超ハッピーなタクシー運転手のケネス・フィールドさんとの出会い、等々▼仙台、定禅寺ストリートジャズフェスティバルでも東北大地震後に楽器を贈った当時小学生や中学生の女の子がすっかり成長して、今もジャズをやっている姿に眼を細めるお2人▼銀座三越では子供向けジャズ・イベントに出演、デイズニーで23年間培ったジャズの楽しさが子供たちに大うけ。横浜ちぐさでの企画「ちぐさでジャズ探検隊」4回シリーズの大団円の模様▼「中村宏さんの心温まる出版をお祝いする会」に集まったみなさんの心温まるシーン、NYのヘレン・メルルさんからのお祝いのメッセージも素敵です。(山)

編集長から